
森田子龍の古典回帰について
—革新的な書の礎としての古典研究—

本発表では、1960年代における森田子龍の古典回帰について検証する。第二次大戦後に前衛的な作風で活躍した書家、森田子龍(1912-1998)は、1951年に雑誌『墨美』を創刊し、国内外の美術家や批評家と交流したことから、美術史においても重要な人物である。だが、1960年代は森田が古典に回帰した時期とされ、後年森田が抽象絵画を痛烈に批判したことから、森田と美術界の関係については、未だに評価が定まらない部分が多い。しかし実際には、この古典回帰の時期にも森田は革新的な制作を続け、独自の書の理論の構築も試みている。そこで本発表では、森田の作品群の検証と、『墨美』や墨人会の文献資料の分析を通して、森田の古典回帰が持つ意味を考察する。

森田の古典回帰については、1958年に『墨美』において、禅僧である白隠の特集が3号続くことが、彼の興味が近代絵画から古筆へと移行する節目であり、美術への接近からの方針転換だとされてきた。だが、森田の作品には、1960年代にも革新的な試みが見られる。例えば、1950年代の森田には、濃墨を使うことで、筆を運んだ跡を視覚的に現す実験的な作例が多いが、彼は1960年代にはそれをさらに進め、アルミの粉と漆を使って金色に発色する作品を制作した。ここには筆を運ぶ跡をより鮮明に残す効果や、海外で求められるような保存に耐える作品を作る意図があった。つまり、古典回帰とされる時代にも、森田は海外の視線を意識し、制作の新たな挑戦を続けていたのだ。

では、なぜ森田は古典回帰をする必要があったのか。1950年代の『墨美』を検証すると、そこには当時国立近代美術館次長だった今泉篤男が影響を及ぼした可能性が指摘できる。1955年にヨーロッパを巡回する書の展覧会が開催された頃には、革新派の書家達と権威的な書壇との軋轢があり、森田は既に書壇から離れていた。しかし、この巡回展には立場の異なる書家達が参加しており、森田にとっては自らの書の未来を展望する展覧会だったといえる。この展覧会の開催に尽力した今泉は、日本の洋画との比較から、書に「伝統の純血」という要素を求めており、森田の古典回帰にも一定の影響を与えたことが考えられる。

さらに、墨人会の資料からは、1962年に森田が語った書の理論の背景には禅思想があり、とりわけ、仏教学者の久松真一が唱えた「無相の自己」との関係がみられることが明らかになる。森田は理論面でも、禅という古典的な思想を基に新たな探究を行ったのだ。

これらの検証から、『墨美』での古典回帰と、作品制作の新しい試み、禅を背景とした森田独自の書の理論の構築は、全て同時期に行われていたことが分かる。本発表では、これらの要素が相互に関連していたことを指摘することで、森田の古典回帰は保守化を示すものではなく、革新的な書を探究する礎であったという見解を提示したい。